

## 公開講座

## 歌う金子みすゞ

平成30年10月8日(土) 14:00~15:30 / 会場 B208

幼児教育学科 教授 前田 敬子

今年度初めて金子みすゞ講座を開催し、金子みすゞの歌を紹介し、創作に関する発見を伝えました。

金子みすゞの詩の魅力として、広く知られるのは「優しさ」。小さなものに目を配り、目に見えないものを見る「感受性の豊かさ」。「みんなちがってみんないい」のフレーズの肯定的メッセージ。「こだまでしょうか」のコミュニケーションの妙。だけど、みすゞも「みんなを好きになれないから」「みんなちがってみんないい」と思えないからこそ、作品が生まれたのかもしれない。

みすゞの作品は、西條八十に見出されて、雑誌に掲載されました。「どこかふつくりした温かい情味が謡全体を包んでゐる。この感じはちやうどあの英国のクリスティナ・ロゼッティ女史のそれと同じだ」という褒め言葉は多くの本に紹介されていますが、実は、八十は同時に難点をも指摘しています。「言葉や調子の扱ひ方にはずるぶん不満の点がある」と言うのです。みすゞの作品を、現代の私たちは漠然と「詩」と受け止めがちですが、正しくは「童謡」ジャンルであって「詩」ではありません。

では、童謡(の歌詞)と詩とはどこが異なるか、八十はどのように考えていたか。当時の雑誌の選評を見ると、八十の考えがわかります。童謡には「歌へる調子」が必要だと書いています。みすゞの立場に立つならば、八十に指摘された欠点を直そうと努力を惜しまないでしょう。歌える調子を獲得するために、みすゞは何をするだろうかと考えた私は、八十の童謡掲載を求めるみすゞの投書と、八十の創った童謡(歌詞)を辿りました。そして、みすゞの作品には、八十の童謡の内容に向けて反論したり回答したりして内容を拡大発展させ、尚且つ、形式は連単位の対比を際立たせて整えたものが多いことに気付いたのです。

紙幅の都合上、数ある例の中から一例を示します。みすゞの代表作の一つ「星とたんぽぽ」と八十の「星と苺」を比べてみましょう。(「/」は改行を、「//」は連が分かれることを示します。)



写真1 みすゞの故郷仙崎にある壁画 2014.3 撮影

## 星とたんぽぽ

青いお空の底ふかく、/海の小石のそのやうに、/夜がくるまで沈んで、/昼のお星は眼に見えぬ。/見えぬけれどもあるんだよ、/見えぬものでもあるんだよ。//散つてすがれたたんぽぽの、/瓦のすきに、だまつて、/春のくるまでかくれて、/つよいその根は眼にみえぬ。/見えぬけれどもあるんだよ、/見えぬものでもあるんだよ。(金子みすゞ 『全集Ⅱ』)

## 星と苺

赤い苺が/もう実らぬ/苺畑の/さびしさよ。//あちらこちらと/探しても/青い葉つばに/風のおと。//赤い苺は /見えずとも/夏の夕べの/たのしさよ。//弟とあふぐ/大空に/星はすゞしい/数をます。(西條八十 『童話』 大正十一年八月号)

八十「星と苺」は、「苺が消えた畑はさびしいが、空には星の数が増してたのしい」と歌います。みすゞ「星とたんぽぽ」は「昼の星や散つたたんぽぽは、見えないけれどもある」と歌います。これは、「消えたものの代わりに現れるものがある」と歌う八十に対して「見えないけれどもある」と反論しているように見えます。同時に、言葉の



写真2 みすゞの故郷仙崎 2014.3 撮影

「調子」を歌の一番二番のように連ごとの対比を整えたものです。このように八十の曲譜を元にしながら、連ごとの対比を整えた例が、他にも複数見出せることがわかりました。

八十の作品は既に曲がついて歌える調子を備えていますが、みすゞの方が一層、五線譜の下に歌詞を並べ書く形に整えてあります。歌の最大の聞かせどころ（所謂、「さび」）を繰り返し句にして―「星とたんぼぼ」で言うなら、「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」―、その言葉のリズムで、歌える調子を醸し出しています。他にも、「海と山」、「お月さんとねえや」、「まち」、「暦と時計」等、八十の曲譜を元に、みすゞが内容を拡大発展させ、歌える調子を整えたように見える作品が複数見つかりました。

みすゞ作品を縦断的に辿ると、初期の作品は、連ごとの対比形式が整っていません。五線譜の下に書くことが意識されていないのです。例えば、代表作の一つ「大漁」は、意味上の対比は「濱」と「海のなか」で明確なのですが、形式の上では、対比が整っているとは言えません。

#### 大漁

朝焼小焼だ/大漁だ/大羽鰯の/大漁だ。//濱は祭りの  
/やうだけど/

海のなかでは/何萬の/鰯のとむらひ/するだろう。

（全集Ⅰ・大正十三年三月号『童話』）

形式上の対比は無く、「ある一つの物事（たとえば「大漁」を）異なる二つの視点（たとえば「濱」と「海の中」）から順に表現する」のが、初期の作品の特徴なのです。それに比べて「星とたんぼぼ」は、「一つの視点から異なる二つの物事（「星」と「たんぼぼ」）」を表現しており、連単位の対比表現が、歌の一番二番を形づくり、あたかも五線譜下に歌詞を二段に重ねて書くことを想定したかのようなのです。

逆に晩年の作はどうでしょう。意味上の対比も形式上の対比も鮮明なのですが、中身の面で、「童謡」と呼ぶには躊躇する作品があります。「啞蝉」や「ころ」がそれです。

#### 啞蝉

おしやべり蝉は歌うたふ、/朝から晩まで歌うたふ、//  
誰が見ても歌うたふ、/いつもおんなじ歌うたふ。//  
啞の蝉は歌を書く、/だまつて葉つばに歌を書く、//  
誰も見ぬとき歌を書く、/誰も歌はぬ歌を書く。//（秋  
が来たなら地に落ちて、/朽ちる葉つばと知らぬや  
ら。）（全集Ⅲ）

#### ころ

お母さまは/大人で大きいけれど。//お母さまの/おこ  
ころはちひさい。//だつて、お母さまはいひました。/  
ちひさい私でいつばいだつて。//私は子供で/ちひさ  
いけれど、/ちひさい私の/ころは大きい。//だつて、  
大きいお母さまで、/まだいつばいにならないで、/  
いろいろな事をおもふから。（全集Ⅲ）

「啞蝉」は書くことを禁じられ、密かに作品を書いても日の目をみることはない悟るみすゞ、「ころ」は心の中が娘ふさえさんでいっぱいになるほど愛してやまない母としてのみすゞの姿を、投影しているように思えます。形式は整っていますが、果たして子どもが歌う楽しい童謡なのかは疑問です。ただ、作者の姿の投影という点は、みすゞが八十の童謡観を確実に受け継いだ証とも言えましょう。なぜなら、八十の有名は童謡「かなりや」について、作中の「かなりや」が自分自身を投影したものと八十は明かしているからです。

現代の私たちは、金子みすゞの作品を「詩」と同様に受け止め、専ら意味を読み取ることに夢中で、「童謡」ジャンルとして受け止める認識は薄いかもしれません。しかし、みすゞ自身は、歌うための「調子」を創ることに心を砕いていたことが、八十の曲譜との比較を通して理解されるのでした。

※日本児童文学会の2017年秋季大会で口頭発表した内容を論文化、応募して、2019年3月発行の学会誌『児童文学研究』に掲載が決まりました。公開講座で、成果の一端をお伝えしようとしたのですが、やや時間切れとなりました。内容を更に短縮しました。